資料　山形県における地域体験型科目の開発と実践

―村山・置賜・庄内地方の地域資源を活用して―

滝　澤　　匡 [1)]

1）山形大学学術研究院（地域教育文化学部）

本研究では，学生の地域志向性の醸成と汎用的能力の向上をめざして，山形県の村山・置賜・庄内の３地方において地域固有の文化・歴史・産業・地域活動を活用した地域体験型科目の開発と実践を行った。その結果，６市町の地域資源を活用した８体験プログラムを構築し，2013年度～2019年度にかけて実施した。プログラムは合計37回実施し，受講者はのべ240名に及んだ。単位互換による受講は山形県内の５大学・短期大学部からのべ58名（24%）であった。主にふりかえりレポートをもとに学生の感想を抽出した結果，学生の地域理解が深まりとコミュニケーション力や協調性などの汎用的能力の向上がみられた。

キーワード：地域体験型科目，アクティブ・ラーニング，社会人力，地域人材，若者の定着

１．はじめに

大学等の高等教育機関は地域の知的創造活動の拠点であり，地域が抱える諸課題の解決にむけて人材の育成等を通じた貢献が求められている(中央教育審議会生涯学習分科会, 2013)。特に地方では多くの若者が都市圏へ流出し人口減少が急激に進んでおり，地域で活躍する人材の輩出は急務となっている。それを受けて，多くの地方大学が、地域の多面的な学習を通じて地域を知って関心をもち、地域と関わりを持ちたいと思う地域志向性を涵養する科目を開講し，地域人材の輩出にむけた教育・研究を展開している(IDE大学協会, 2017; 牧野, 2017; 光本, 2018; 神戸大学地域連携推進室, 2019)。例えば，茨城大学では，学生が茨城への理解を深め，地域課題等を考える力を身につけることを目的に，茨城の自然・歴史・地理・文化・産業などを学修する必修科目「茨城学」を開講している。「茨城学」を学ぶことにより，地域に関心をもち，地域に関わって活動したいと思う学生の層を拡げること，地域を担う人材の入り口となることをねらいとしている(清水, 2016)。

地域と関連した教育・研究は大学教育において新たに求められる学習成果とも関連している。中央教育審議会は大学の学士課程で育成すべき 21 世紀型市民の能力としてコミュニケーション・スキルや問題解決力を含めた汎用的技能，チームワークやリーダーシップ等の態度・志向性などの４つの能力を挙げている(中央教育審議会, 2008)。地域に関連した教育や研究は，多くの場合，現場での体験的な学習（アクティブ・ラーニング）を伴う(早川, 2017)。これらの体験的な学習方法が学生の汎用的能力（ジェネリックスキル）の向上につながることが幾つかの研究により報告されている(木村・中原, 2012; 中里・

吉村・津曲, 2015; 安田・野口・直井, 2016)。このような，地域での体験を含んだ学習により学生の汎用的能力（経済産業省では“社会人基礎力”と表現される）を向上させる教育は経済界からも求められている(経済産業省, 2006)。

山形大学でも山形県内の地域資源を活用した教育や研究が数多く実施されている(山形大学 COC＋推進室, 2018)。専門教育課程の科目や研究は当該学部の学生しか受講できないが，基盤教育課程の科目は全学部の学生が受講できる。この基盤教育課程の地域体験型科目として，最上地域 8 市町村と連携した科目「フィールドワーク：共生の森もがみ」が 2005 年度より実施されている（科目名は 2017 年度より「フィールドラーニング：共生の森もがみ」に変更）(杉原, 2010; 杉原・橋爪・時任・小田, 2015; 阿部, 2018)。授業目標を「最上，山形，日本，そして世界を知ること」「課題発見能力，行動力，社会性等の基礎的な力を身につける」とおき，学生が最上地域の地元活性や伝統文化等の地域活動に参加し学習する。年間で 20 以上の体験プログラムが開講され，1 プログラムあたり 10 名程度，合計 200 名近い学生（2009 年）が受講する(杉原, 2010)。

山形県には最上の他に村山・置賜・庄内の 3 地方があり，地域固有の文化・歴史・産業等が存在する。また，各地域で特有の課題があり，その解決にむけた様々な活動が実施されている。このような地域資源・地域活動を活用した教育は学生たちの地域志向性を高めることが期待される。しかしながら，これら 3 地方の教育資源を活用した地域体験型科目は基盤教育課程でほとんど展開されていない。そこで本研究では，3 地方にある 6 市町の地域資源や地域活動を体験的に学習する 8 プログラムの開発と実践を試みた。本報では，実践した各プログラムの学習内容と受講生の学びを報告する。それらの結果より，開発した地域体験型科目の教育効果について地域志向性の醸成と汎用的能力の向上に着目して考察する。

2．方法

（1）開講科目

担当教員（滝澤）が 3 地方の地域資源を調査し，幅広く学生の興味を集めることが期待される学習内容を選定し, 2012 年 10 月～2013 年 1 月にかけて現地講師等に事前説明・交渉を行い, 2013 年度～2019 年度にかけて体験プログラムを実施した。

体験プログラムは山形大学基盤教育課程の教養科目（2013～2016 年度）および基幹科目「山形から考える」(2017～2019 年度）において開講した。2013～2017 年度では科目名を「感じる山形～教科書の向こう側へ～」としてプログラム 1～4 を前期に，プログラム 5～8 を後期に開講した。2017 年度以降は体験プログラム名を科目名とした。

科目は，文部科学省平成 24 年度大学間連携共同教育推進事業「美しい山形を活用した『社会人力育成山形講座』の展開」の一部として実施し，2013～2016 年度は単位互換科目とした。

（2）学習時間

地域での体験的な学習を約 4 日間（6 時間/日），週末や長期休業中に実施した。その他，授業ガイダンス（2 時間），事前打ち合わせ（2 時間），成果発表会（7 時間）を行った。

（3）指導方法

地域資源の担い手である地域の方々に現地講師として直接ご指導いただき，担当教員は学生の円滑な

授業参加や安全確保など補佐的な指導を行った。これにより，幅広い学習プログラムの展開，地域資源に関する細かい指導，教育的な質の確保が可能となった。

（4）受講定員

地域での活動規模や指導者とのコミュニケーションを考慮し，各体験プログラムの受講定員を7名程度とした。

（5）課題

社会人基礎力の向上にD.コルブの経験学習サイクルにもとづいた学習が効果的である(高橋, 2010)ことから，内省的視察および抽象的概念化を促すことを目的に，毎回の体験後にふりかえりレポートを課した。レポートでは，活動内容のまとめ・学びと気づき・失敗点と反省点・次回の学習への意気込み・質問及び提言，自身で解決した疑問の5項目を自由記述させた。

3．結果

（1）体験プログラム

山形県の3地方6市町の様々な地域資源を活用した，8体験プログラムを2013～2017年度にかけて合計37回実施した【表1】。

表1　実施した体験プログラム

体験プログラム		実施市町村	学習する地域資源	学習時期	開講年度
1	山形の森づくり体験	南陽市	自然、林業、地域活性化活動	5月～8月	2013～2019
2	民話語り部体験	南陽市	文化、歴史、方言	5月～7月	2013～2017
3	赤湯温泉まちづくり体験	南陽市	地域活性化活動、観光、農業	6月・7月	2013～2016
4	庄内文化体験	鶴岡市	歴史、文化、観光	6月・9月	2013
5	地域のにぎわいづくり体験	山形市	地域活性化活動、文化、農業	11月・1月	2013～2019
6	雪とともに生きる体験	尾花沢市	地域活性化活動、自然、農業	11月・1月	2013～2019
7	台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験	長井市	農業、自然、地域活性化活動	9月・10月	2013～2017
8	月山の恵みを感じる秋まつり体験	西川町	地域活性化活動、自然、文化	10月・1月	2013

（2）受講者数

8体験プログラムの受講者はのべ240名，プログラムあたりの平均受講者は6.5人であった。単位互換による受講は山形県内の5大学・短期大学部からのべ58名（24%）であった。受講学生の学年は1年生177名（74%），2年生45名（19%），3年生15名（6%），4年生3名（1%）であった【表2（論文末に掲載】。

（3）各体験プログラムの学習内容と受講生の学び

各体験プログラムの学習内容と現地講師（受入団体）について以下に述べる。なお，複数年度に渡り実施したプログラムは2016年度の内容を記した。受講生の学びについては主にふりかえりレポートをもとに記載した。

1）山形の森づくり体験

受入団体：NDソフトウェア株式会社，山形県エネルギー環境部みどり自然課，南陽市農林課

NDソフトウェア株式会社・山形県・南陽市が実施する森林保全活動「NDソフト・こもれびの郷プロジェクト」に参加した。この活動では，市民が気軽に訪れられる癒しの森の創出を目的に，南陽市市

有林の下草刈りや歩道敷設などの森林整備作業を月 1 度行っている。この活動へ 4 ヶ月間参加し，現地での作業をご指導いただいた。社員の方々とグループでの作業を通じて，組織で活動する際に必要なコミュニケーション力や進んで作業に参加する積極性の育成を図った。

〇初回 5 月 21 日の活動では演習地を周り，プロジェクトリーダーから活動の目標や計画，進捗状況を説明いただいた。学生は活動全体のゴールと自分たちがすべき事をしっかりと理解していた。その後，道具の安全な使用方法と複数人で作業する際の安全管理について学び，実際に鎌や鋸を使った森林整備を行った。森での活動後，社員の方々と救命救急講習を受講し，AED の使用や人工呼吸法，止血方法など事故への対処法を学んだ。〇6 月 18 日以降の活動では，社員と学生が混在するグループに分かれ，下草刈り・歩道敷設・水路整備などを行った。班長の指示に従い道具の準備や作業分担がなされ，年長者と組織での活動を経験する機会となった。また，チェーンソーや刈り払い機による作業も経験し，森林整備が危険と隣り合わせであることを認識し安全へ意識を高めていた。また，森に関する知識と新たな活用方法を学ぶ目的で，置賜総合支庁産業経済部森林整備課の職員から山形県や南陽市の森林や林業について講義いただいた。これを通じて，自分たちが活動する山形の森林の特徴と現在の問題点について深く理解できた。

活動を終えた学生は「子どもたちが遊べる場所を作る活動に参加できて，とても嬉しい」「漫然と作業するのではなく，周囲の安全に配慮しながら自分の作業にも集中する力をつけることができた」「森での作業では主体的に動かないといけない場面が多く，先を考えて動くことの重要性を感じた。これからの専門の勉強にも活かしていきたい」「一つの目標にむかって多くの人と協力して取り組む難しさと楽しさを知ることができた」「講師の方とのお話で将来の夢に気がつくことができた。私自身も地元（山形）に就職して、人との縁を大切にし、趣味を続けられたら幸せだろうと考えた」と感想を述べた。

2）民話語り部体験

受入団体：夕鶴の里資料館，民話会ゆうづる

山形の地域が持つ文化と伝統にふれることを目的に，南陽市で民話と口承文化の素晴らしさを伝えられている民話会ゆうづるの語り部の方々に民話語りをご指導いただいた。また，資料館の方々には，民話ゆかりの地を巡るツアーなど民話の学びを深めるプログラムをご指導いただいた。活動を通じて，年長者に対して進んで教えを請う積極性や頂いた助言を吸収し自身の成長へ繋げる柔軟性など，若い社会人にとって必要な能力の育成を図った。

〇初回の活動ではまず講師による民話語りを拝聴した。学生たちは初めて聞く南陽民話の面白さに魅了されつつ，語られる方言の魅力を感じていた。「やさしい語り口と方言で心が温かくなり，自然と笑顔になっていた」と感想を綴った。続いて，館長から館内を案内いただき，南陽市宮内地区の主産業であった，製糸業の歴史を学習した。〇2 回目の活動では，各学生が課題に選んだ民話を読み始め，不明な点を講師の方から直接ご指導いただいた。特に方言の発音やアクセントなどテキストではわかりにくい部分を丁寧に教えていただいた。午後は館長と職員の方のガイドの下，南陽市内の民話ゆかりの地を巡り，民話とそれが生まれた土地・背景をあわせて学んだ。学生は「講師の方の熱のこもった丁寧な説明をうかがい，深く理解できた。また，山形の人々の地元愛を感じた」と述べた。〇3 回目の授業では，実際に人前で語る練習を行った。なるべくテキストを見ずに語りを行ったが，正確な暗唱に集中するあまり個性を失っていることを指摘され，最終回にむけた課題が明確となった。また，他の学生の語りから

学ぶ姿勢も見られ，互いに切磋琢磨するグループ活動の長所が垣間みえた。〇最終回では，鶴の恩返しで描かれる機織りを実際に体験した。その後，学習の集大成としてホールで民話語りを発表した。学生たちは教えていただいた方言や語りの技法を思い出しながら豊かな表情で丁寧に語っていた。当初テキストを読むだけであった民話が南陽の方言で豊かに表現されており，講師の方々からも高く評価いただけた。

体験を終えた学生は「民話のストーリーの面白さ，教訓の普遍性に加えて，温かな方言が民話の魅力であることを知った」「覚えた民話は自分の財産となった。家族や友人，将来の自分の子どもへ語っていき，日本の伝統を守ることに貢献したい」と感想を寄せた。また，「上の世代の方々と交流することで消極的な性格を改善したいと思い受講したが，充分に達成できた」「語りの難しさを知ることで講師の方々の素晴らしさがより実感された。憧れや尊敬が向上心となった」と残した。

３）赤湯温泉まちづくり体験

受入団体：赤湯温泉ゆかい倶楽部

赤湯温泉街の活性化に取り組む「赤湯温泉ゆかい倶楽部」の方々にご指導いただき，温泉街の魅力にふれながら，街を賑わす活動に取り組んだ。これらの活動を通じて，年長者から進んで学ぶ姿勢やグループの中で個性を活かしながら効率的に活動することを経験し，コミュニケーション力など汎用的能力の向上を図る機会とした。

〇初回の活動では，赤湯駅から温泉街まで約２キロを歩き，観光客と同じ視点から課題の発見を行った。到着後，街を彩りながら観光客に南陽の方言を知ってもらう地域活動，“方言花壇”の手入れを行った。学生たちは「花壇を綺麗に保つのは重労働で，まちづくり活動が肉体的にも精神的にも大変なことがわかった。同時に，活動を続けられる強い地元愛を感じた」「観光客に楽しんでもらえるよう様々な工夫が素晴らしかった」と感想を述べた。昼食では，観光客にむけた新たな企画である“まちなか箱弁当”に参加し，実現可能性や課題の抽出を行った。〇活動２日目は，雨天のため，サクランボの収穫を行った。脚立に登る作業では「安全への配慮など，多くのご苦労を知ることができ，大変良かった」と感想を残した。〇活動３日目は，翌日の朝市で販売する野菜の収穫を行った。販売する野菜に傷がつかないよう丁寧な作業をご指導いただいた。学生らは「何気なく食べていた野菜に農家の方々の思いがつまっていることを実感できた。観光客にも農作業体験に参加してもらい，同じように感じてもらえるとうれしい」と述べた。その後は朝市出店にむけてノボリやポップ，値札の作成を行った。〇朝市当日は４時に起床し，商品をリヤカーに積んで会場へ運搬し，開店準備を整えた。初めは躊躇してお客さんに話しかけられなかったが，教わりながら少しずつ声を出しはじめ，野菜の美味しさや新鮮さを大きな声で伝えていた。その結果，準備した野菜のほとんどを販売することができた。学生たちは「自分たちが収穫した野菜を買ってもらえ，嬉しかった」「お客さんの様子を見て試食をすすめるなど工夫ができた」と述べた。朝市での出店は，目標達成に向けて改善を行いながら，苦労の先にある達成感を経験する機会となった。その後，４日間に渡り赤湯温泉街の魅力にふれた経験をもとに街の活性化へむけたアイデアを発表した。

体験を終えた学生は「赤湯の方々は地域への愛情があふれていて，地元を盛り上げようとされる姿がとても素敵だった」「ゆかい倶楽部の皆さんのように周りを巻き込んでまちづくりを行うためには，行動力やコミュニケーション力を高める必要があると痛感した」と感想を述べた。

４）庄内文化体験

受入団体：龍澤山善寶寺，羽黒山出羽三山神社

善寶寺での禅修行体験と出羽三山神社での山伏修行体験を行い，庄内地方の歴史と文化を学んだ。体験中の法話や講話，座禅や鎮魂，修行の心得などから，周囲の方々や食に対するありがたみを考え，普段の生活を見つめなおす機会となった。

本プログラムの現地体験は東北公益文科大学の１年次科目「庄内の文化」に同行する形で行った。◯龍澤山善寶寺では上山直後に体験の心得が説明された。その際，住職から挨拶の声が小さいと厳しく注意され，修行であることを強く理解させられた。心得では歩行の姿勢から食事の作法まで細く決められており，「肉体的には辛かったが，食事に集中し日々のご飯のありがたさを改めて感じた」と感想を残した。特別なルールと環境に身を置くことで，日常の生活を見つめなおす機会となった。午後の住職の法話では「支えられて生きている感謝の気持ちを忘れないように」とメッセージをいただき，挨拶や人との繋がりの重要性を感じていた。その後，境内を拝観した。期間中３回の座禅が行われた。始めは痛みに耐えるだけであったが次第に慣れ，日没後の最後の座禅では「座禅が終わると達成感があり，自分の心の中で何かが目覚めたような気がした」と感想があがった。その日は境内に宿泊した。◯２日目は４：30 に起床し，朝の祈祷や作務（掃除）を行った。昼食後，参加学生全員が感想や質問を述べ，体験をふりかえった。◯後半の山伏修行体験では羽黒山の出羽三山神社を訪れた。台風の影響のため，表参道（石段）の登拝は中止となったが，宮司の方に神社音楽について講話をいただいた。参拝後，三神合祭殿にて正式参拝の儀が執り行われた。その後食事の際の作法が説明され，食のありがたみを再び考える機会となった。善寶寺の座禅に代わり，羽黒山では鎮魂と呼ばれる精神鍛錬を行った。座禅が落ち着いた沈黙の中で気を静めるのに対し，鎮魂では祓詞を唱えながら集中力を高めていった。学生は「忍耐力と精神力が鍛えられた」とふりかえった。◯二日目は清掃の後，朝の日供祭に参列した後，修行者が身をおく行堂へ移動し，最後の鎮魂を行った。その後，博物館を拝観し，出羽三山の歴史に関する講義をうかがった。その後，石段を下り下山した。

４日間の禅修行・山伏修行体験では仏教や神道にふれ，周りの人々や食に感謝しながら生きることを教えていただいた。また，寺社の文化や美術について学ぶ機会ともなった。ある学生は「雅楽の相承や変容を卒業論文のテーマとしたい」と語り，発展的な学習が期待された。また，多くの学生が「体験での学びを普段の生活に活かせるよう，精一杯頑張りたい」と述べた。

５）地域のにぎわいづくり体験

受入団体：柏倉にぎわいづくりネットワーク

山形市柏倉地区の活性化をはかる柏倉にぎわいづくりネットワークが主催する行事の運営に参加し，地域の文化や魅力とそれらを活用したまちづくりを体験した。「干柿まつり」では，柏倉地区の柿を利用し，七日町の商業施設を干柿で彩る活動を行った。「柏倉ぼんぼりまつり」では，御柴灯の会場をキャンドルや雪灯籠の灯りで彩り，地域の伝統行事を盛り上げる活動を行った。これらを通じて，年長者から進んで学ぶ積極性，グループの中で効率的に活動する行動力などの向上を図った。

◯11 月の活動では「干柿まつり」の運営に参加した。柏倉地区の渋柿を活用し，繁華街にある商業施設「七日町御殿堰」にて干柿にするイベントである。黒塗り木造の御殿堰を橙色の干柿で覆い，懐かしい秋の風景を蘇らせることで訪れたお客さんを楽しませた。初日の収穫では，高枝切バサミや脚立を用

いて 1500 個以上の柿を集めた。干柿づくりでは，皮を剥いた後ビニールロープにかけて熱湯をくぐらせて，吊った竹竿にかけていった。「初めはうまくできなかったが，次第に高枝切りバサミの扱いにも慣れ，スムーズに作業を進められた」「効率的な作業にむけたチームワークの難しさを感じた」などグループ活動を経験する機会となった。さらに，「御殿堰を一層趣のある空間とすることができた。道行く方々が楽しそうに写真を撮っており，地域への貢献を実感できた」と地域活動のやりがいに気づいていた。◯11 月下旬にはできた干柿をふるまう「収穫祭」を開催した。その後，御殿堰の代表および山形まるごと館紅の蔵のコーディネーターから市街地の活性化についてお話うかがった。そこでは，「既にあるものを活かすことで若い人が地域の魅力に気づく」「昔からあるものは世代を超えて多くの人々を魅了する」など市街地と周辺地域に共通する地域活性化策を教えていただいた。◯1 月の「柏倉ぼんぼりまつり」では伝統行事“いわいいわい（御柴灯）”の会場を盛り上げる活動を行った。他の地域団体とも協力し，会場へ続く道に数百個のぼんぼりを作成し，訪れた方々を楽しませた。ふるまいの甘酒や焼きマシュマロは子どもたちに大変好評で，伝統行事の盛り上げに一役買っていた。当日は大雪の中での活動であり，これまで以上にチームワークが求められた。「活動を通じて効率化を図るためのコミュニケーションの必要性を学んだ。今後の生活で活かしていきたい」と感想を残した。

活動を終えた学生らは「柏倉の方々があたたかく指導してくださった。外からの人間も受け入れてくれるコミュニティーが地域活性化につながると感じた」「将来の夢と関連があり受講したが，より具体的なビジョンを持つことができた」と感想を述べた。

6）雪とともに生きる体験

受入団体：尾花沢市地域支援課，市野々地域づくりの会，尾花沢市雪研究会

雪の実態と生活の苦労にふれながら，そこから生まれた知恵・文化・楽しさを学ぶ目的で，世界有数の豪雪地である尾花沢で体験を行った。体験は尾花沢市地域支援課にコーディネートいただき，雪との生活や尾花沢の魅力についても体験的に学習した。降雪前の体験では雪囲いを尾花沢市雪研究会の運営部会長よりご指導いただき，覚えた技術で地域施設の冬支度を行った。降雪期の体験では，除雪に関する講習で基本技術と安全について学習後，市内の高齢者宅や橋の除雪を行った。これらの活動を通じて，共助による地域の方々のつながりにふれながら，年長者から積極的に学ぶ姿勢や安全に配慮した共同作業を経験した。

◯降雪直前の 11 月の活動では雪に備える準備を体験した。雪囲い（そがき）の必要性と文化的背景について講義いただいた後，実践に向けてロープの結び方を教えていただいた。午後からは，レジャー施設が行う冬への備えを学習するため，外灯や配電盤をビニールで覆う作業を行った。学生は「紐をしっかりと結ぶのはとても体力がいり，時間のかかる作業であった。冬に備える大変さを理解できた」と述べた。その後，尾花沢発祥の花笠踊りをご指導いただき，伝統文化とそれを次世代に伝えていく重要性を学ぶ機会となった。◯翌日は市野々地域づくりの会代表や市野々地区長ら地域の方々のご指導の下，沿道の花壇の整備や冬季イルミネーションの設置に参加し，地域で行う冬への備えを学習した。◯1 月の体験では除雪活動を行った。尾花沢市雪研究会運営部会長より安全上の注意点と除雪器具の使い方をご指導いただいた後，他の除雪ボランティアと共に市内の高齢者宅の除雪を行った。学生は「数人の学生で一軒を除雪して，僅かな雪をかくだけであった。除雪の大変さを体験的に知ることができた」と述べた。◯二日目の体験では，雪深い市野々地区へと移動し，農道に架かる橋や公民館の除雪を行った。

活動後は地域の方々とひっぱりうどんを食べながら，交流をはかることができた。学生は「豪雪地域の暮らしや文化を学び，雪の素晴らしい面も知ることができた」と述べた。その後，屋根や玄関先の融雪を目的に開発が進められている装置を見学し，雪に対する新たな取組についても学習した。

体験を終えた学生は「地域の方々と活動させていただくことで繋がりがうまれ，自分も一員である誇りが芽生えると感じた。将来は自分も積極的に地域で活動し，より良いコミュニティー作りに貢献したい」と述べた。豪雪地のご苦労だけでなく，厳しい雪との生活から生まれた人々の繋がりといった尾花沢の魅力についても深く学ぶことができた。また，コミュニケーション力の向上を目的に受講した学生は「尾花沢の方たちとの交流を通じて向上を実感した。地域の皆さんが温かく話しかけて下さったことが大きなきっかけとなった」「丁寧に教えていただき，年長者から指導を受けることの楽しさに気づいた」と感想を述べた。

7）台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験

受入団体：レインボープラン推進協議会

食と環境を守る地域循環型農業を学ぶ目的で，家庭から出る生ゴミを堆肥として地域農業に利用する，長井市の取組「レインボープラン」を体験的に学習した。堆肥化の行程を学ぶだけでなく，有機農業や野菜販売も経験し，総合的に食や農業を考える機会となった。これらを通じて，共同で作業する際に必要なコミュニケーション力や指導を受ける際の積極性など社会人力の向上を図った。

長井市では，家庭からでる生ゴミを回収して堆肥に変えて，その堆肥を地域の農業に活かす事業「レインボープラン」に取り組んでいる。本体験ではレインボープラン推進協議会の方々のご指導の下，事業を総合的に体験し，食の安全と環境保全につながる地域循環型農業を学んだ。

○初日はレインボープランの仕組みと理念を学習後，コンポストセンターで堆肥化の行程を見学した。そこでは，活動が生ごみを通じた物質的な循環に留まらず，生産者と消費者の循環，市の中心の住宅地と周辺の農耕地を結ぶ関係であることを講義いただいた。○2 日目の朝，生ゴミ集積所を見学し，分別の注意点や回収方法が確立するまでの経緯を住民の方にうかがった。事業が市民一丸となって取り組むものであると知る機会となった。その後，事業の創設メンバーのお一人からレインボープランの基本理念となる土着微生物の重要性をお話いただいた。学生たちは「土を通じた生命の循環を知り，目先の利益にとらわれず将来を考える必要があると感じた」と述べた。その後，枝豆の収穫・脱莢・選別作業を行った。農作業の実態にふれるとともに，流れ作業を通じて連携や効率化を考える機会となった。作業を終えた学生は「想像以上に体力が必要だが，工夫により手間が省け作業効率が上がるのがわかった。農家の方々の経験から来る知恵を感じた」と感想を寄せた。○3 日目は，枝豆の収穫と翌日のイベント販売にむけた準備を行った。前回と同じ作業であったが，チームワークとコミュニケーション力の向上がみられた。○最終日には，イベント会場において枝豆の販売を行った。レインボープラン野菜の美味しさと生産者のご苦労を知ったうえでの販売とあって力も入っていた。店舗販売に加えて会場内での移動販売を行い，用意した野菜を完売できた。学生は「消費者と言葉を交わすことで，農家の方の喜びを理解できたように感じた」と述べた。その後，推進協議会のコーディネートにより全体ふりかえりが行われた。レインボープランが長井市民の繋がりによる互恵的な関係であることや次世代へも拡げていく必要があることなど，人と人の循環という視点から体験をまとめていただいた。

全活動を終えた学生は「循環型社会では農業だけでなく，人と人の繋がり，自然と人間の繋がりが大

切と感じた。未来を見据えて経験を積んでいきたい」「販売体験を通じて，人に魅力を伝えるプレゼンテーション力が必要と感じた」と感想を述べた。

８）月山の恵みを感じる秋まつり体験

受入団体：大井沢秋まつり実行委員会

西川町大井沢で大井沢秋まつり実行委員会が開催する２つの地域イベントの運営に参加し，月山の自然と文化を活用した地域活性化活動を体験した。イベントでは学生スタッフとして準備と運営に参加し，地元の方々や訪れたお客さんと交流を図り，社会人力の向上をはかった。

◯授業初日には，翌日から開催される「大井沢きのこまつり（月山かもしか学園祭）」の会場となる旧大井沢小学校の清掃及び設営準備を行った。一年間の汚れが着いた窓ガラスを少人数で綺麗する作業は大変であった。その後，明日の役割分担などミーティングを行った。学生は「まつり当日の配置をイメージしながら作業すべきだった」「スタッフ間でのコミュニケーションが足りなかった」と反省し，与えられた仕事をこなすだけでなく，効率的な方法を考える必要を感じていた。◯まつり初日は会場での誘導にあたった。笑顔での挨拶や年配の方の荷物を持つなど細やかな配慮もみられた。さらに昨日の反省を活かし，会場内の店舗の配置を確認して迅速な誘導を行っていた。学生は「お客様から感謝の言葉を多くいただけ，とても嬉しく印象的でした」と感想を述べた。◯翌週のまつり２日目は東北文教大学短期大学部の学生ボランティア約40名と共同で作業にあたった。慣れない共同作業だったが，文教短大の学生から細かく説明をうけることで順調に作業できており，コミュニケーションの大切さを実感する機会となった。◯体験４日目は１月に行われた「雪ん子祭り」で運営の手伝いを行った。主に雪の大すべり台の監視員や餅つき･餅飾りづくりを担当した。このような作業中に地元の方々と話す機会に恵まれ，学生たちは「故郷について考える貴重な機会となった」とふりかえった。

４．考察

本研究では，山形県の村山・置賜・庄内地方の６市町の地域資源を活用した８つの地域体験プログラムを開発・実践した。そこでの学習を通じて、学生が地域を知り、関心を高め、地域に関わりたいと思う地域志向性が醸成された。また，コミュニケーション力や協調性，年長者に対する態度など社会人として求められる汎用的能力の向上がみられた。このような学習効果をもたらした要因として，現地での体験的な学習，現地講師からの直接指導，様々な学生とのグループワークなど本科目の学習要素が影響したと考えられる。地域志向性の醸成と汎用的能力の向上について要因とともに考察する。

地域志向性の醸成

開発した体験プログラムにより山形の自然・文化・産業・地域活動などを深く理解し、地域への興味・関心を高めるなど、地域志向性が醸成されていた。これらの要因として現地での体験的な学習が挙げられる。地域の自然｛１）山形の森づくり体験・６）雪とともに生きる体験・７）台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験・８）月山の恵みを感じる秋まつり体験｝，伝統的活動｛２）民話語り部体験・４）庄内文化体験・５）地域のにぎわいづくり体験｝，人々の活気｛３）赤湯温泉まちづくり体験・５）地域のにぎわいづくり体験・７）台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験｝などは現地でなければ理解できない地域の魅力である。また，方言のあたたかさ｛２）民話語り部体験・３）赤湯温泉まちづくり体験｝，収穫の喜び｛３）赤湯温泉まちづくり体験・７）台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験｝，修行体験に

よる陶酔感｛4）庄内文化体験｝なども体験学習でなければ感じることができない。穏やかな環境の教室とは異なり，炎天下や豪雪のなかで五感によって理解した地域の魅力は強い刺激となって学生たちの記憶に刻み込まれたと考えられる。

また，本科目では地域資源を熟知する現地講師による直接指導を採用することで，担当教員の専門領域を超えて幅広い学習内容の提供が可能となった。この指導様式が地域理解の促進や地域への意識を高めることにもつながった。例えば、2）民話語り部体験や3）赤湯温泉まちづくり体験では現地講師の方々のご指導のなかに地元愛を感じていた。1）山形の森づくり体験や5）地域のにぎわいづくり体験、6）雪とともに生きる体験、8）月山の恵みを感じる秋まつり体験では講師との関係の中から地域での就職や地域活動への積極的な参加意識、故郷に対する思いが芽生えていた。技術や知識の学習理論である認知的徒弟制では学習ステップの初期に教育者が手本を示すことが重要とされている(西城, 2012)。指導では，最初に現地講師がこれまで実践されてきた方法を学生に示してくださることが多く，これが効果的な学びにつながったと考えられる。また，学習ステップの終盤には学びの言語化やふりかえりが重要とされるが，レポート課題によってこれらの学習が遂行されたと考えられる。

さらに，様々な学生とのグループワークも地域理解や地域志向性の醸成に寄与したと考えられる。協同に基づく活動性の高い授業により1つの授業科目で認知的側面と態度的側面が同時に獲得できるとされている（安永, 2015)。認知的側面は学習内容の理解やスキルの向上であり，本研究の体験型科目においては学習対象である地域および地域資源への理解となる。これらの地域理解が進んだ理由には，他の学生の価値観や考え方にふれて自身の学習を比較する機会となったこと，成果発表やふりかえりレポートの共有などを通じて他者の学びや理解から学習できたことが考えられる。

汎用的能力の向上

本科目は6大学・短期大学部から複数の学年の学生が受講しており，多様な人々とのコミュニケーションの場となった。例えば、5）地域のにぎわいづくり体験や7）台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験、8）月山の恵みを感じる秋まつり体験では活動の効率化に必要な集団におけるコミュニケーション力を向上させていた。多様な学生が集まることで異なる価値観・考え方にふれる機会となり，協調性や責任感，規範意識を向上につながったと考えられる。このような協同学習によるコミュニケーション・スキル，対人スキルの向上は多くの研究でも見られている｛(安永, 2015）によるまとめ｝。

また，現地講師による指導も重要であったと考えられる。特に1）山形の森づくり体験や2）民話語り部体験、6）雪とともに生きる体験では講師の方々とのコミュニケーションが貴重な学びとなった。単に立場の異なる者とのコミュニケーションだけでなく，指導的立場の年長者への尊敬は傾聴力や規律性の向上につながったと考えられる。

今後の課題

今後の研究では，学習効果をより正確に捉える必要がある。本研究では学生の学びや変化をふりかえりレポートを通じた感想から抽出しており，学生の主観的な変化を捉えるだけであった。今後は学生の地域理解や汎用的能力の変化を客観的･定量的にとらえ, 正確な教育効果を把握することが必要となる。

また，体験プログラムにより醸成された地域志向性が学生の就労地選択や実際の地域定着につながるのかは不明である。青森県の大学生に対して行われた調査では地域志向科目（講義・演習・実習等を含む）の受講が地元就職希望を高めることが報告されており(李・山口, 2018)，本研究でみられた地域志向

性の醸成が学生の地域定着につながると期待される。

5．謝辞

学生を温かく受け入れてくださり，丁寧なご指導賜りました現地講師の方々に感謝の意を表する。

6．引用文献

IDE 大学協会（2017）『IDE・現代の高等教育』：民主教育協会.

阿部 宇洋（2018）「フィールドラーニングとフィールドワークの差異と民俗学への応用」『山形大学高等教育研究年報：山形大学教育開発連携支援センター紀要』第 12 巻, 29-32.

木村 充・中原 淳（2012）「サービス・ラーニングが学習成果に及ぼす効果に関する実証的研究：広島経済大学・興動館プロジェクトを事例として」『日本教育工学会論文誌』第 36 巻, 第 2 号, 69-80.

経済産業省（2006）『社会人基礎力に関する研究会「中間とりまとめ」報告書』, 1-34.

神戸大学地域連携推進室（2019）『地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム事業 2018COC＋REPORT』.

西城 卓也（2012）「正統的周辺参加論と認知的徒弟制」『医学教育 ＝Medical education』第 43 巻, 第 4 号, 292-293.

清水 恵美子（2016）「大学の組織的な取り組みの工夫 茨城大学の地域志向教育と新しい PBL の取り組み」『大学教育と情報』第 2016 年度巻, 第 3 号, 14-17.

杉原 真晃（2010）「現地体験型授業「フィールドワークー共生の森もがみ」のしくみ」. 小田 隆治・杉原, 真晃編. 『学生主体型授業の冒険』 京都市: ナカニシヤ出版, 100-113.

杉原 真晃・橋爪 孝夫・時任 隼平・小田 隆治（2015）「サービス・ラーニングにおける現地活動の質の向上：地域住民と大学教員による評価基準の協働的開発」『日本教育工学会論文誌』第 38 巻, 第 4 号, 341-349.

高橋 浩（2010）「経験学習理論に基づく社会人基礎力向上のための実践的研究」『立正大学心理学研究年報』第 1 巻, 35-43.

中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築にむけて（答申）」.

中央教育審議会生涯学習分科会（2013）「第 6 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」.

中里 陽子・吉村 裕子・津曲 隆（2015）「サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」『アドミニストレーション』第 22 巻, 第 1 号, 164-181.

早川 公（2017）「「地域志向教育」とは何かー地域学, フィールドワーク, 拡張現実」『教育・学生支援センター紀要』第 1 巻, 17-25.

牧野 暁世（2017）「鹿児島大学における地域志向教育の現状」『鹿児島大学教育センター年報』第 13 巻, 10-21.

光本 滋（2018）「高等継続教育と大学改革：国立大学における生涯学習部門の動向を中心に」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 130 巻, 151-162.

安田 孝・野口 理映子・直井 玲子（2016）「アクティブラーニングの反復がジェネリックスキルの変化に及ぼす影響 - Project-based Learning 型授業を用いた検討」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』

第 24 巻, 43-56.
安永 悟（2015）「協同による活動性の高い授業づくり」. 松下 佳代編. 『ディープ・アクティブラーニング』 東京都: 勁草書房, 113-139.
山形大学 COC＋推進室（2018）「“地域創生マインド”を醸成する地域志向教育の展開」『ニュースレターやまがた創生便り』第 9 巻, 1.
李 永俊・山口 恵子（2018）「「地域志向科目」が地方大学生の就職地選択行動に及ぼす影響について ―弘前市における大学生質問紙調査から ―」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第 14 巻, 3-14.

表２　体験プログラムの受講者

体験プログラム	開講年度	受講者数	内訳（機関・学年）															
			山形大学				東北芸術工科大学				東北公益文科大学			東北文教大学		東北文教大学短期大学部	山形県立米沢女子短期大学	
			1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	2年	3年	2年	1年	2年
民話語り部体験	2017	7	7															
	2016	7(1)※	2	1(1)				3										1
	2015	5	2					1		1			1					
	2014	5	2	1									1	1				
	2013	5(2)	2		1			2(1)										
赤湯温泉まちづくり体験	2016	7	4								1	2						
	2015	7	5	1								1						
	2014	8	5					1				2						
	2013	10(2)		5(2)							2	3						
山形の森づくり体験	2019	6	6															
	2018	6	6															
	2017	4	4															
	2016	7(1)	4	1(1)						1			1					
	2015	5	4										1					
	2014	7	4											3				
	2013	6	3	1											2			
台所と農業をつなぐ地域循環型農業体験	2017	4	4															
	2016	7	6									1						
	2015	6	5						1									
	2014	9	5	2					1					1				
	2013	9	4			1					1	1					2	
地域のにぎわいづくり体験	2019	7	7															
	2018	7	7															
	2017	7	7															
	2016	7	5									1				1		
	2015	7	5				1		1									
	2014	7	5				1		1									
	2013	7	3					1				1			2			
雪と共に生きる体験	2019	7	7															
	2018	6	6															
	2017	7	7															
	2016	7	5					1								1		
	2015	7	5				1				1							
	2014	7	6						1									
	2013	6(1)	3					1(1)	1			1						
庄内文化体験	2013	5	3	1				1										
月山の恵みを感じる秋まつり体験	2013	2	2															

※カッコ内の人数は聴講生を示す。